慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東亜文化の再検討
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学部研究室
Publication year	1944
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.7 (1944. 7) ,p.439(1)- 451(13)
JaLC DOI	10.14991/001.19440701-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌　第三十八卷　第七號

東亞文化の再檢討

野村兼太郎

一

世界文化の發展史上に占める東亞の地位は決して低いものではない。東亞は人類にとつて最も古い傳統を遺してゐる地域の一つである。一九二一年スウェデンのアンダッソン博士に依つて北京の西南約三十七哩の周口店において發見された古代人類の遺骨は世界最古のものと同時代であるといふ。所謂北京支那人類（Sinanthropus pekinensis）といはれてゐるものがそれである。このことは黄河一帶のこの地方に遥かに悠遠の昔から人類の生息してゐたことを示すものである。勿論それが直ちにこの地方の文化發生を意味するものではないが、東亞の天地が世界最古の人類活動の舞臺の一つであつたことは明かである。

北京支那人類がこの地方に住居してゐた時代に人類がどの程度まで東亞に住居してゐたのか、又如何なる範圍にまで及んでゐたか、今は知る由もないが、極めて早い時代から人類が東亞の各地にその生活の根據を求めてゐたの

ではなからうか。舊石器時代の遺跡はシベリア・蒙古・滿洲・北支の各地において發見されてゐる。これらの人類の生活が極めて低度にあつたことは明かである。殊に氷河の來襲も數回に亘つて起つてゐたやうであり、地殼の變動も少なくなかつたやうであるから、彼等の生活は決して安定したものではなかつたらう。これらの點については、こゝで詳論する必要はないし、又多くの研究も公にされてゐる。Hellmut de Terra, "Pleistocene Formations and Stone Age Man in China," 1941. や Pierre Teilhard de Chardin, "Early Man in China" 1941. には要領よく記述されてゐる。

これら古い人類の生活と後の東亞文化と如何なる關係に立つか勿論明かではないが、それらの生活が地盤をなして、永い間に徐々に文化の曙光が現れ始めたのである。といつてもこれらの人類の子孫が必ずしもその後の文化の擔當者であるといふわけではない。ただ一つの文化の生成には單に外來文化に據る建設といふだけではなく、常に土著文化の發展を基礎とする必要があることを指摘せんとするのである。

東亞における最も古い文化は黃河の流域に發展した。何故に最初の文化がこの地方に先づ起つたのであらうか。勿論この問題は容易に解決し得るものではない。單に一應の解釋を與へることが出來るに過ぎない。あらゆる人類文化の發生地が河川の沿岸にあるといふことが、この場合も適應されよう。放牧から牧畜へ、さらに農耕へと發展していく過程が認められゝば、河川沿岸がそれらの經濟生活に最も適當であることは明かであらう。耕作技術の上にも、交通の上にも、從つて又他文化との接觸にも河川が大きな役割を占めてゐることは否定し得ない。しかしそれならば今日黃河流域よりもさらに適當と思はれる南方揚子江沿岸に何故に發生しなかつたのであらうか。氣候風土の狀態はあまり短い期間には殆ど變化らしい變化も示さないが、長期に亘つて觀察すると、そこにかなり大きな變化がみられる。殊に初期にあつては相當顯著な變化があつた。東亞に文化の興り始めた頃には、揚子江一帶の地域は今日よりも遙かに濕地帶で、原始林が鬱蒼と繁茂してゐたとのことである。從つて人類の生活にはあまり適してゐなかつたと考へられる。勿論當時にあつても沿岸地帶に、殊に海邊には原始民が住居してゐたらうが、それらの生活程度は極めて低かつた。故に南方よりも北方の方がより早く開發され得たと推定される。

さらに北方の原始民は早くから西方の他種族と接觸し、その文化的影響を受けてゐたことも考へられる。東西兩文化が接觸したことがあるといふのも、勿論文書のない時代であるから、直接確たる證據があるわけではないが、新石器時代より末期にかけて、河南・奉天・甘肅・青海附近から石器と共に多くの彩色土器が發見され、それらはロシア領トルキスタンのアナウの出土品とか、南ロシアのトリポリエ、メソポタミア平原のスウサ、印度のモヘンジョダロ・ハラッパの土器等に類似性をもつてゐることから、何らかの文化的交流が考へられるのである。ある民族が違つた民族と接觸し、その異種文化の刺戟を享受することは、その文化の進展に重要な因由を作る。北方の住民が早くから西方の異種文化と接觸する機會があつたとすれば、その刺戟に依つて南方よりも早く高度の文化に達し得たといふことは容易に推測し得ることである。

黃河沿岸に文化の發生し始めた頃、すでに東亞各地に人類がその生を營み始めたのであらう。彼等の生活は恐らく極めて原始的であつたらう。しかし兎に角そこに生の營みが始まると共に、東亞の自然的諸條件に適應し、その生活を向上させんとする人々の努力が始まり、東亞獨自の生活樣式が創られた筈である。このことは大陸においては勿論、東方及び南方に散在せる島々においても、その努力が開始されたのである。それらの努力はいふまでもなく記錄に遺されたものではない。所謂考古學的遺跡遺物として後世に傳へられたものも極めて一小部分に過ぎない。

しかしそれら人類のなした努力は全然湮滅してしまつたわけではない。あるものは後世の土俗のうちに、又は言語のうちに、さらに幾多の傳說のうちに、その痕跡を遺してゐるのである。

最も早く高度の文化を建設した北支にしても、その所謂三皇五帝說の如きは勿論後世の假託であらう。三皇とは天皇・地皇・人皇（秦皇）であるといひ、又伏羲・神皇・燧人であるといふ。五帝は黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜となすのが普通である。恐らく後世の五行說の影響の下に作られたものであり、實在せるものではない。さらにその後の夏殷周の時代になつても、幾多の傳說的記述や後世の附加物が混入して、どの程度まで現在せる事實とみるべきか、極めて困難である。しかしこれらのものを構成するに至つた基本には過去の事實が存在するのであり、假令それらのすべてが人間の頭腦的產物であつたとしても、思想そのものが元來事實を反映して生じたものであるから、これらを分析檢討することに依つて過去の事實を幾分なりとも明瞭になし得る筈である。勿論このことは必ずしも傳說時代についてのみでなく、その後文書記錄の確證ある場合でも同樣である。一般に考へるやうに簡單に事實として認めることの出來ない場合が少くない。殊に東亞經濟史の研究においては多くの土俗・風習の檢討が役立つ、かつそれには極めて處女地であるだけに周到な用意が要求される。

東亞に於ける文化の發展がかく古く、しかもその以後繼續的に發展して今日に至つたのであるから、その文化發展の過程においても、西洋におけるそれと自ら異なるところのものが存する筈である。然るに從來東亞におけるこれら發展史の研究は、歷史研究が支那・日本等においてかなり高く評價されてゐたにも拘らず、未だ甚だ不十分である。少くともその方法において缺くるところが頗る多い。近世に至つて西洋史學の移植に依つてかなりの學的進展をみたことは疑ひないが、未だ東亞の資料を十分に檢討し、そのうちから發展過程の本質的なものを十分に理解し得るに至つたとはいひ得ない。西洋における史的發展の東洋への模倣的適用がなされてゐるに過ぎず、東洋自體の獨自性をわれわれ自身に依つて明かにしたものは未だ創られてゐない。

もとよりこのことは容易な業ではない。一朝一夕に完成されようとは思つてゐない。しかし東亞の指導國をもつて自ら任じてゐるわれわれにとつては、當然なさなければならぬ仕事である。東亞の文化が如何にして形成され、如何に發展し、如何なる特質を有するかを明かに知ることが、將來東亞文化を指導する基準を與へることになる。殊にその經濟形態を明かになし得て始めて妥當なる經濟的指導を可能ならしめる。今までの日本の學問はその意味であまりにも自己の身の廻りを構はな過ぎたのである。

二

東亞といふ名稱の地理的限界は必ずしも明瞭ではない。アジア全體についてみれば、世界の陸地の約三分の一、一千七百萬平方哩を占むる廣大な地域であり、ヨーロッパの三百八十一萬平方哩に比較すれば、ほぼその四倍半に匹敵する。東亞はその東半分とするも甚だ尨大である。支那及び印度を含み、その東方諸地域を東亞と稱するのが妥當であるかも知れないが、こゝでは研究の對照を支那大陸及び東方・南方の諸島に限定することゝする。東亞の文化の主流はそれらの地方の環境を背景として創り上げられたものである。

東亞の文化を構成する自然的要素としては二つの面が認められる。一つは大陸的風土であり、他の一つは海洋的又は島嶼的風土である。

アジアの面積は廣大ではあるが、その多くは高原地帶である。中央に世界最高の高原地があり、その高原が東西に連續して延びてゐる。パミール高原から東方へ、西藏・新疆・蒙古の大高原が連なり、その大部分は大沙漠地帶

である。これらの高原地帶には、ヒマラヤ・カラコラム・崑崙・阿爾金・祁連等の諸山脈が東西に走り、その餘脈は延ひて支那內地に入り、所謂北嶺・南嶺の諸山脈を作つてゐる。パミィル高原の東北の方には、葱嶺・天山・アルタイ・杭愛の諸山脈が走り、いくつかの區域に大陸を分かつてゐる。その結果自ら各地の交通――文化の交流を阻んでゐる。中央から四方に流下する河川すらも多くは外海に出ることが出來ずに、各所に內海を形成してゐる。ただ支那の平原地帶を流れる黃河・楊子江、シベリアの平原地帶にあるアムゥル・レナ・エニセイ・オブ等の諸川が人類文化に大きな役割を演じてゐることは看過し得ない。

尨大な大陸の大部分が溫帶に屬してはゐるが、峻流の關係上北米、ヨォロッパに比較して氣溫は低い。山脈と山脈との間を通じて西と東とをつなぐ幾筋かの道路は、東西それぞれに發展していつた異種の文化を繫ぐ重要な役目をもつてゐたのではあるが、なほかうした地勢が東亞には東亞獨自の文化を生ぜしめたことは當然であらう。

この大陸の東から南にかけて連なる日本及び南洋の諸島は、大陸內地とは全く異なつた生活樣式をもつことは自然である。日本を除き他の多くの諸島が熱帶に位し、そのために特に衣食住に依つて刺戟さるることは少なく、文化發展の機會に乏しかつたとみられるが、貿易風のやうな特殊の刺戟があり、そこに海洋民族としての獨自の生活が營まれたことは認め得よう。渺々たる大洋を日常眺めて暮してゐた人々の間には、同じ東亞の天地とはいへ、大陸の同胞とは全く異なつた生活樣式と生活意識とをもたざるを得なかつたらう。

この二つの自然的要素はそれぞれ違つた地域を支配してゐるのであるが、人類の文化の交流はある程度まで兩者を混淆させる。殊にその點において日本の文化の如きは最も注意に値するものである。

東亞の文化がその自然的環境から大きく影響されてゐることはこれを否定し得ないが、その文化がすべてそれに依つてのみ創られたと考へることは出ない。自然が人類の生活を制約することは必然であるが、人間がその自然の制約を受け容れる致方には種々樣々のものがある。その受け容れ方の如何が人類の創る文化にそれぞれ違つた形式を與へるのである。かつその自然の制約の相違も極めて複雜である。換言すればその地方差には甚だ大なるものがある。例へば同じ支那內地だけをとつてみても、南支と北支とは勿論、中支ともそれぞれ甚しく相違する。單に北支・中支・南支と違ふばかりでなく、同じ北支の間にあつても少なからざる地方差がある。かく自然的差違が大であるところに、これに對する人類の對策が又相違するのであるから、それから生ずる文化樣式は細い點になれば甚だしく複雜な、かつ微妙な差異を生ぜざるを得ない。

それにも拘らず、こゝに特に地理的・風土的影響を概括的に問題とするのは、それらが根本的に人類の生存を制約するものであり、かつ同じ地域における自然的諸條件が人類の生活にほぼ同じやうな影響を與へ、共通の特徵を示してゐるからである。微細な點において幾多の差違があつても、本質的傾向において類似性をもつことが多いのである。この意味において東亞文化の發展を明かにする場合にも、東亞を構成する地理的、自然的諸條件を明かにする必要があるといふのである。

自然的諸條件を明かにするといふ意味は、單にそれらの客觀的知識を究明するといふだけではない。それらとその地方の住民との諸關係を明かにしなければならない。地域的な自然條件がその地域における人類に如何なる形態において受け容れられてゐたかを綜合的に觀察することは、單に地理學的考察に止まらず、人類學的、民俗學的、考古學的、言語學的な諸考察の援助を必要とする。

東亞における民族構成は簡單ではない。しかし主要なる文化檔當者を考へれば、自ら南方系と北方系とに分かつ

ことは可能であらう。

通常南方系諸民族のうちに算へられる主要なるものは、(一)支那族、(二)交趾支那族、(三)西藏緬甸族である。支那族は所謂漢民族を中心とするものであり、東亞文化の最重要の擔當者であつたことはいふまでもない。交趾支那族は史上に蒲蠻・閩越・南越・安南・交趾・南詔・大理・林邑・占城・眞臘・暹・羅斛（老稱）・暹羅等の諸國を形成した民族として現れ、それらの遺跡よりみるも、決して輕視すべきものではない。西藏緬甸族は史上には氐・羌・吐蕃の名を以つて現れてゐるが、西藏・ネパール・ブータン・シッキム・アッサム・緬甸等の國々を形成した民族である。この外文化の程度の著しく低いものを算へれば、なほ多くの南方諸族を擧げられるであらうが、東亞文化の進展に直接關係あるものは以上のものであらう。

北方系諸民族中主要なるものは(一)ツングウス族(二)蒙古族(三)土耳古族であらう。その外フィン族・サモエード族その他幾多の小種族がある。ツングウス族の主たるものはシベリア・滿洲にあり、肅愼・扶餘・高勾麗・靺鞨・渤海・女眞・金・清等の國を樹てた。蒙古族が元を建て、又西方に發展したことも周知のことであり、土耳古族は元來支那の西邊からトルキスタン地方にあり、かつて大月氏として東亞文化に密接な關係のあることもよく知られてゐることである。

日本民族が南方系に屬するか、北方系に屬するか未だ明確でない。元來大陸の東に長く列る島國であり、多くの民族の結合から成り、その文化も南方系・北方系兩者の影響を受けてゐる。民族の根幹をなすものは北方系民族と考へられようが、元來島國として特殊の發達をなしたのであらう。從つて言語の如きも多くの影響を受け、そのために俄かにその歸屬を斷定し得ないような狀態にある。かゝる特殊の狀態にあることが又その東亞文化史上における地位に特殊の意義を附與するものと見るべきであらう。

これら東亞を舞臺として活躍せる諸民族が元來その地理的環境に影響されて各自の文化を形成したのではあるが、他方相互の文化的交流と彼等自身の傳統とに依つて、そこに複雜な文化構成をもつに至つたのである。われわれが東亞文化史を檢討するに際しても、出來る限りその構成を分析すると共に、その傳統の源流を探究する必要があるのである。殊に東亞各地における文化の交流を十分に檢討することが必要であり、それに依つてわが日本文化の構成をも今よりももつと科學的に明かにすることが出來ると信じてゐる。

經濟的發展の面からみる時には、大體三つの部分について考察するのが適當であると考へてゐる。即ち北方における牧畜を主とするもの、中央における漢民族を中心とせる農耕文化の發展、南方においては、海洋における活動を主とした漁撈文化がそれである。勿論それらが常に同一業務に停滯してゐたといふわけではない。それらの各文化の交流は各自の經濟生活を複雜化し、發展していつたのである。この間にあつて日本は中央の農耕文化と南方の漁撈文化との影響を最も強く受けてはゐるが、他方前述せる如く民族的には北方の影響が強く、そこに特異の文化構成を成就したものであらう。從つて第四の研究範圍として日本を中心とせる部分を認むべきであらう。

三

西洋の文化發展の眼を以つて東亞における狀態を觀察し、東亞文化の停滯性又は後進性を云々する者もある。殊に經濟的方面においてそれらの發展が遲々たるものがあつたために、一層さうした考へ方が行なはれがちである。しかし西洋的發展のみが人類發展史上の唯一の致方でもなし、又それだけが正常のものと考へることも正しくない。東洋における人類の文化史上における寄與は西洋におけるそれに劣らず、又それと違つた「もの」見方」も成立し

得る筈である。元來西洋文化の近代的發展はむしろ東方文化の刺戟に基づくところ頗る大なるものがある。

他方において東洋文化も西洋文化と著しく異なる面をもつてはゐるが、古くから全く別個に發展したものでもない。東亞における文化の發展をみても、それは常に孤立的なものではなく、西方文化との關聯をもちつゝ發達したものである。支那の歴史に現れて來る多くの民族のうちには、今日なほ十分にその素性を明かになし得ないものが少くない。殊に支那と西域地方との關係は早くから生じ、そこには未だに明白になし得ない諸民族との交渉がある。白鳥博士・藤田博士等のこの方面に關する價値ある諸研究に依つて多くの點が明かにされてゐるに拘らず、なほ不明のところが少なくない。西方文化との關係は所謂アジア的なるものを明かにする上に頻る重要である。

西方文化との接觸のうちで、近世西洋資本主義の東漸ほど重要なものはないことは周知のことである。それは東亞における經濟生活を根本的に變革するものであつたからである。東亞の天地を唯一の世界としてそこに生活の基本を構成してゐた東亞の諸民族は決してこの新來の勢力を歡迎しなかつた。違つた文化樣式をもつ兩者の交流は必ずしも幸福なもののみであつたとはいひ得ない。西洋文化の齎した個人的自覺は東亞においても從來の政治形態を打破しなければ止まなかつた。東亞は古き秩序を棄てゝ新しき秩序を樹立しなければならなかつた。このことは永い傳統をもつ東亞の諸民族にとつてさう容易なことではなかつたのである。このことから生じた東亞文化の混亂は今日と雖もなほ續いてゐるといつてよい。あらゆる方面において未だ解決されざる問題が殘つてゐるのである。

強力な西洋文化の影響の下に、殊に經濟力の壓倒的な強さに依つて、あらゆる方面に改革を餘儀なくされた東亞諸民族は全面的に西洋模倣に依つてその生活を切り替へるか、又はその經濟力の下に屈服するか、その何れかを選ばなければならなかつた。模倣は常にその文化を弱體化する。創造力を失なつた東亞民族の生活は全面的に西洋的なるものへ屈服せざるを得なかつた。しかし永き傳統をもつ民族の力はそのまゝ消滅し終るものではない。

東亞の文化は西洋文化のもたざるものをもつ。西洋的「ものゝ見方」のみが唯一の見方ではない。ただその壓倒的な物質的勢力に依つて眩惑された東亞民族は自己本來の姿をすら見失なつたのである。近世的合理主義、個人主義的利己主義の發展が現代社會に大きな寄與をなしたとしても、それはすでにあらゆる方面において行詰りを生じてゐるのである。それらを打開しやうとする非合理性の强調はすでに現れてゐる。東亞における「家」「國」などの問題は新しい角度から見直す必要があるのである。

われわれは西洋文化を一概に排除することは出來ない。そこに生じた合理的な科學の發達はこれを包容しなければならない。もとより科學のもつ限界は十分認識すべきであるが、同時にその方法を利用し、われわれの祖先の創造した文化の本質を把握しなければならないのである。數千年來の傳統をもつ東亞文化には容易に棄つることの出來ない偉大なるものをもつてゐる。西洋文化を受け容れるのは本來の文化をより高度に引き上げるために過ぎないのである。西洋の文物をそのまゝに輸入して、その形骸を模倣せんがためではない。この點において東洋文化の發展を跡づけることの必要は今日におけるほど急務なるはないのである。

東亞における偉大なる文化の擔當者は漢民族であつた。その發展の經過は一見停滯してゐるが如くみえる。しかし北方黃河沿岸に起つたこの民族の文化は次第に周圍に同化作用を起してゐる。幾度か他民族のために征服されたが、却つてそれらの民族を包容し、同化しつゝ、强力にその文化を發展させていつたのはこの民族である。包容力は極めて大である。東亞文化の中心として支那文化の檢討批判は先づ最初になされなければならない。しかしそれは單に從來なされてゐる所謂支那學の程度であつてはならない。支那文化の再批判は單に支那文獻の再檢討、歐米

人のなした支那學の研究以上に、われわれ自身の眼を以つてなされなければならない。かつ又それは東亞全體との聯關の下になさるべきものである。

支那文化の大きな影響の下に育成されていつた日本文化は特殊の意義をもつものである。このことはすでに上述したところでもある程度まで理解されようが、日本民族のもつ特殊の地位に關聯するものである。外來文化を常に全面的に攝取する點においては、東亞における他民族の比ではない。かつて支那文化を全面的に受け容れた日本民族は西洋文化をも同樣に攝取した。しかし常にそれで滿足はしなかつた。一度包容した文化を結局自己のものにするまで不斷に努力する。かつその祖先が支那文化を攝取した時にも、又西洋文化を受容した場合にも、これを自己のものとなし得る程度の理解力をもつてゐた。支那のものを理解し得ると、同時に西洋のものも理解し得るのである。この點において日本民族ほど大きな包容力をもつ民族は少ないといつてよからう。

勿論その長所は時に短所となつて現れることを免れない。唐に心醉し、西洋に歸依し、日本自身の文化を忘却することさへ起つた。しかしかゝる包容力をもつことは東亞文化の擔當者としてその將來性の極めて大なることを意味するのではなからうか。日本が東亞史上のみならず、世界史上にもつ大きな役割はこの包容力とその上に立つ創造力とに依つて決定されようゞこの意味において日本文化の再檢討が必要とされる。それは東亞諸民族との關聯において檢討されると共に、日本文化自體のもつ本質を究明せられなければならない。いふまでもないが、こゝに文化といふのは單に文物藝術のみをいふのではない。その民族のもつ生活樣式全體を指すのである。この點においてはわれわれ自身についても未だ檢討せられざる分野が頗る多いのである。

（この一篇は東亞經濟史の研究の急務を論ずる目的を以つて執筆したのである。私自身としてはこの後にそれらの研究方法について具體的に論及する計畫であつたが、時間の餘裕がなく、思ふ如く認めることが出來ない。單なる前文のみを以つて責をふさぐのみ。讀者幷びに編者の寛容を乞ふ次第である）　昭和十九年十月八日稿